



転生者は
チートを望まない 4

奈月 葵
Aoi Natsuki



レジーナ文庫



AINCELDA

フィルセリアの兄。
腹黒な王子様。

FILSARIA

フィーメリア王国
国王の孫娘。
通称「姫様」。

AUVEL

フィーメリア王国初代女王と共に
魔物退治をしていた勇者。
ドラゴンの魔石を体に
埋め込まれた魔王でもある。
800年の眠りから覚めて以来、
ミラの魔力制御を
手伝うことになる。

GAI

魔法学園に通う
ミラの幼馴染み。
火の魔法を操る。

DEINE

水の精霊。
ミラを守るべく彼女の
魔力を吸収し、
高位精霊に成長。

SARA

火の精霊。
ミラの魔力暴走を
抑えるため
高位精霊に
成長。

GRAN

地の精霊。
ミラの大魔法に
よって高位精霊に
成長。

RUFY

風の精霊。
ミラの大魔法によって
高位精霊に成長。

大人の姿に
なったミラ

魔法世界に転生し、
魔法学園に通う6歳の女の子。
最強魔力と精霊の力を借りて、
様々な魔法を操る。
魔力を制御しきれず、
大人の姿になる事があり
困っているが……

MILA

目次

転生者はチートを望まない4

書き下ろし番外編
八年後

転生者はチートを望まない4

プロローグ

王家の庇護ひごを受けて、国立魔術学園初等部に通っていた私——ミラは、四日前に魔力暴走を起こしてしまった。それ以来、ファーメリア城の迎賓棟の最上階に部屋を借り受けている。今、その部屋には音楽が流れていた。

音源は、窓際に置かれたテーブルの上にある大地の宝珠。音と映像を記録できる魔法の宝石だ。

同じテーブルの上で音楽に耳を傾けているのは、三頭身の精靈達。彼らは私の契約精靈である。

地の精靈グノー、風の精靈ルフィー、火の精靈サラ、水の精靈ディーネ。本来の姿は八頭身の美男美女なのだけど、私が小さくて可愛いモノ好きなせいか、おちび姿でいる事が多い。

部屋の中央には、軽やかなステップで踊る若い男女が一組。

少年の名はアインセルダ・ユル・ファーメリア様——通称、アイン様。この国の王子様である。金髪碧眼きんぱつけんがん、眉目秀麗びもくしゅうれい。甘い微笑みを浮かべてパートナーの少女をリードする姿は、まさに王子様。

そのアイン様に手を取られて頬を赤く染めているのは、イーメルディア・ファーメリア様。私はメルディ様と呼んでいる。彼女はアイン様に恋い焦がれ、婚約者候補筆頭の座を維持すべく、努力を重ねる公爵令嬢だ。ダンス中にアイン様に見とれていても、複雑なステップを難なくこなす。

なぜ二人が踊っているのかと言うと、私にダンスを教えるためだ。約一ヶ月後に行われる夏至祭げしじさいで、私は勇者様と共にダンスパーティーへ参加する事となつたのである。

その勇者様が、現在私の左隣に立つ美青年。長い黒髪に紫紺の瞳を持つ彼の名は、アーヴィル・ウェスティン様。八百年の眠りから目覚めた彼——ヴィル様は、魔王様でもあります。

かつて大陸を支配していた帝国の皇帝は、ドラゴンに匹敵する魔力と不老不死を得るべく、人の身に魔獸や魔物から得た魔石を埋め込んだ。その皇帝が攫つた女性に産ませた子供がヴィル様で、彼はドラゴンの魔石を四つも埋められた実験体なのである。まったくもつて酷い話だよね。

他にも犠牲者はたくさんいて、彼らは魔に隸属する者——魔属と呼ばれて日々実験に使われていた。しかし彼らはある夜、皇帝を討ち、実験に荷担した貴族や魔術師を根絶^だやしにしたのだ。

同日、騒ぎに乗じて逃げ出した魔獸や魔物^{まじゅう}が一般の人々をも襲い、帝都は一夜にして滅亡した。

以来彼らは、マゾクという呼称を音のみで聞いた人々によつて、魔族——魔の眷属^{けんぞく}と伝えられ、ヴィル様は魔王と認識されたのだつた。

そんなヴィル様が勇者となつたのは、フイーメリア王国の祖、フーラルカ・フイーメリア様と、彼女の婚約者トール様との出会いがきつかけである。諸々の事情を知つたフーラルカ様達は、ヴィル様と一緒に帝国内に急増した魔獸や魔物^{まじゅう}を退治して回り、彼を勇者と称したのだ。

その裏で彼らは、人への憎しみに囚われて各地で暴れています魔族を倒し、あるいは倒したフリをして説得し、王都の北側にある標高が高く険しい山——ユグルド山の向こうへ送り返していたのである。

当時、魔王の仲間だと誤解され、人族との間に溝が広がる一方だつた他種族達も、フーラルカ様と出会い、ユグルド山へ移住したそな。

フーラルカ様が立てた計画は、粗方^{あらかた}上手く進んでいた。しかし、「魔王」がいては民の不安が消えない。その不安は自然界の魔力を汚染し、動物を魔獸や魔物^{まじゅう}に変える。

ヴィル様はフーラルカ様の『魔族を人に戻せる者を探し出す』という言葉を信じて、魔族一同、眠りについたのだつた。

それから八百年の月日が流れ、最近異常な魔力を感じたヴィル様は目を覚まし、私と出会つたのである。他界したフーラルカ様が異世界——地球で見つけた「魔族を人に戻せる人」候補の私と。

転生した私が膨大な魔力を持つていたのは、やっぱり意味があつたのだ。

転生に至る経緯を思い出した私は、ついでに前世で通り魔に殺された事まで思い出しちゃつたものだから、ショックで魔力を暴走させてしまつた。

周囲に被害を出して、私自身も死にかけたわけだけど、その騒ぎをおさめてくれたのはヴィル様だ。

暴走したのが、ヴィル様と出会つてからで良かつたよ。暴走を抑えるための魔法で大人の姿になつちやつて、学園には通えなくなつたけどね。

その後、私は自力で制御可能な量まで魔力を消耗^{しょうもう}したら、一時的に六歳の姿に戻れるようになつたが、魔力が回復してしまえば元の木阿弥^{もと もくあみ}。完全に実年齢の姿に戻るに

は、魔力の器である心か体の成長が必要らしい。

転生者としての使命を果たすのに、体の成長を何年も待つてもらうのはヴィル様に申し訳ない。だから今は、心の成長——精神力を高めて魔力を制御できるようにならうと、訓練をしてるところだ。

修業中の身らしく、滝行たきあがりょうとともにすべきかな?

いや、でも今まで私は精神修養なんてした事がない。なのにこれまで人より多い魔力を制御していたのだから、気がつかないうちに心の成長を促す出来事があつたのかもしれない。

……本、だろうか?前世で本を読んで得た擬似的経験、感動、思考、発想。それが今世で心の糧かてと呼ばれる物になつていたとしたら、本物の経験は、より大きく私の心を成長させてくれる気がする。

幸いと言つてはなんだが、私は大人姿でも果たせるお役目をいただいた。それは、ヴィル様の護衛である。

魔力と武に優れた跡継ぎを得て家を繁栄させるため、勇者であるヴィル様は、多くのツと、だ。

幸いと言つてはなんだが、私は大人姿でも果たせるお役目をいただいた。それは、ヴィル様の護衛である。

貴族から娘婿にと狙われている。それからまも護るのだ。さしあたつては、夏至祭げしさいにおけるヴィル様のパートナー。お嬢様除けである。

子供姿でもできなくなはないけれど、子供とべつたり一緒だと、勇者がロリコンだと思われてしまふかもしれない。不名誉なレッテルが貼られるリスクは避けなきやね。

ってなわけで、ただ今夏至祭げしさいで踊るダンスのレッスン中である。前世でのダンス経験は、運動会のフォークダンスのみ。今世の出身地、イルガ村の祭で踊っていたのも、似たような物だった。

だから社交ダンスっぽいこれは、めっちゃハードルが高い。さぞかし良い経験となるだろう。

曲の終了と共に足を止めたメルディ様とアイン様に、私は拍手を送った。

メルディ様がニコリと笑う。

「基本的なステップはこのような感じですわ。いかがですか? ミラさん」

「壁かべと仲良くしていただきです」

「それでは虫除けになりませんわ」

「ですよね。でも正直な気持ちです。頑張るけれど、もう少し簡単なステップからレベルアップしていきたいです。」

「足が縛れたり、お相手の足を踏んだりしそうですが、これが初心者用の基礎ステップなんですか？」

「ええ。縛れたり踏んだりは、初心者の誰もが通る道ですわ。練習するしかありませんのよ」

そう言つたメルディ様の靴には、凶悪な高さのヒールがある。そして私が履いている靴にもだ。

「足を踏まれる男性方に、同情を禁じ得ないですね」

思わずこぼれた感想に、AIN様が苦笑する。

「そうだね。ダンス教師は地属性が最適、なんて言われるくらいだよ。身体強化で硬化したら、痛みを感じにくくなるからね」

へえ。地属性が身体強化したら、膂力りょりきが上がる事は知っていたけど、硬化の補正もつくんですね。踏まれても痛くない人が、教師に向いてるってわけだ。

納得した私に、笑顔のAIN様が手を差し出した。

「だから気にせずに踏んでしまつて構わないよ」

ああ、そういうえば、AIN様は地属性でしたね。

彼は先日、大人姿の私に一目惚れして本気になつたと言つてくれた。しかし元々は、

高魔力保持者の血筋を王家に取り込みたいと、政略結婚を打診してきた方だ。腹黒さんは苦手である。

それに、王族のお役目を考えるとプレッシャーが半端ないので、彼のお相手はご遠慮したい。メルディ様とお友達になつたから、彼女の真っ直ぐな恋も応援したいしね。ゆえに、この手を取るわけにはいかないのだ。

それでなくとも、パーティでの私のパートナーはヴィル様である。本番まで一ヶ月を切つてているのだから、本番と同じ相手で慣れておいた方がいいだろう。ヴィル様も踊れなかつたら、二人して壁の花でいられたんだけど、彼は踊れるんだよね。

ヴィル様にダンスを教えたのは、フランカ様らしい。曰く『覚えておいて損はない。無愛想でもダンスさえできれば、旅のスポンサーは釣れる』とのこと。なんというか、身も蓋ふたもない。

ヴィル様を見上げた私に応えるように、彼は私に手を差し出す。

「踏まれても問題ない事が条件ならば、最初から俺が相手でも問題ないな」

「ですよね」

生半可なまほんかな刃やいばじや傷きずもつかず、体長三メートル近い魔獸まきゅうを蹴り上げる頑強さを備えたヴィル様だ。小娘の体重がのつたヒールに踏まれたくらいじゃ、ダメージにならないだ

ろう。

私は彼の手を取つて、部屋の中央へ移動した。AIN様の手には、MELDEY様の手が重ねられる。

「もう一曲、お相手をお願い致しますわ」

AIN様と踊れる機会を逃さないMELDEY様。積極的ですねえ。その心意気や良しです！

私は恋愛経験なんてないから、具体的なアドバイスはできない。それでも彼女の行動をサポートするくらいならできる……と思う。

うん、たぶん的外れな事はしないよ？ 恋人いな歴イコール年齢（前世含む）だけどね。

グノーが大地の宝珠を再生し、音楽が流れ出す。私はVIL様のリードに合わせて一步踏み出し——さつそく彼の足を踏みつけた。あうう。難しい……

第一話

数回踊つて貧弱な私の体力が尽きかけた頃、本日のレッスンが終了する。私は疲れた体を引きずつて、部屋の隅に寄せたソファーに腰掛けた。

いかん。パーティ一までに、もっと体力をつけないと。

みんなも苦笑しつつ、ソファーに座る。ダンスの後は、お茶会タイムだ。

「ミラさんって、本当に体力がありませんのね」

私付きのお世話係のカララさんが入れてくれたお茶を飲みながら、MELDEY様がしみじみと呟く。そんな彼女の前に、もう一人のお世話係のエメルさんが、クッキーをのせた小皿を置いた。

今日のおやつは絞り出しクッキー。みんなの前にも置かれ、グノー達が嬉しそうに齧りつく。可愛らしい姿に癒やされながら、私はMELDEY様に同意した。

「一応、体力作りはしてるんですよ。走るのはすぐにバテるので、お散歩や軽い運動ですけど」

無理のない範囲から鍛えようというのは、やっぱり間違いだろうか？

メルディ様を見れば、すらりとした体に程良く筋肉がついている様子。私よりもダンスを踊ったのに、少しも疲れていないみたいだ。

ご令嬢はか弱いイメージがあるが、彼女は駆け出しとはいえハンターだから、それなりに鍛えているんだろう。

ハンターとは、魔獸や魔物を倒し、素材とか魔石を採集する人である。体力が資本だ。凄いなあと感心して眺めていたけれど、あまりジロジロ見るのは失礼かと思つて視線を外し、クッキーを口に運んだ。

その時、メルディ様が手を打ち鳴らす。

「ミラさん、わたくしと一緒にハンター活動をしてみませんこと？ ミラさんの魔力なら、魔物と遭遇しても戦えますし、庭園よりも起伏のある野山を歩いた方が、体力向上に効果的ですわ」

いい事を思いついたと言わんばかりに、顔を輝かせるメルディ様。確かに一理ある。そしてハイキングの経験値もゲットするチャンスだ。でも……

もぐもぐとクッキーを食べ終えた私は、体力が底辺であるがゆえの懸念を口にした。「ある程度体力がつくまでは、ショットちゅう休憩を取つていてだく事になりかねません

よ。」「迷惑ではありませんか？」

「構いませんわ。まずは薬草採集なんていかがかしら。わたくしが採集している間に休む事も可能ですし、薬草学の勉強になりますよ」

薬草採集も、ハンターの仕事の一環である。採集中に魔物に襲われる危険があるからだ。メルディ様がいいと言つてくれるのであれば、拒む理由はない。魔法を使うかもしれないないので、万が一、私が魔力を暴走させた時のために、ヴィル様の同行も決定した。

AIN様からは、ニッコリ笑顔で「がんばって」と激励される。

「では、明日はハンター活動を行う時の装備を買いに、街へ行くのはいかがですか？」

朝九時頃に、装備選びのアドバイザーを連れて参りますわ」

「はい。楽しみにしています」

私は魔力暴走を起こしてから、一般市民を巻き込まないよう、外出を制限されていた。人の少ない平原はともかく、城下街に行くのは禁止。けれど先日、魔力制御の試験で郊外の町に行つた時、魔力を暴走させる事は早々ないとお墨つきをもらえたので、外出は解禁となつたのである。

ちなみに魔力制御の試験を受けたのは、私の安全性を証明して、夏至祭に参加する許可をもらうため。夏至祭では、勇者であるヴィル様のお披露目を兼ねたパレードやダン

スパートナーも行われる。だから彼狙いの『令嬢達がたくさん現れる可能性が高く、その虫除け役として参加したかったのだ。

「あ、そうだ。ヴィル様、明日は魔力を使う予定はありませんけど、よろしければ街までおつき合いいただけませんか?」

「武器や防具のアドバイスはできませんか?」

「フーラルカ様とトール様が作り上げ、八百年かけて発展した国と街を楽しんでいただきたいんです。外食もしませんか?」

もしお二人がご存命の時代にヴィル様の封印が解けていたら、彼女達は自慢の国をあちこち案内したり。代わりと言うには、私の行動範囲が狭いので申し訳ないが、美味しいお店くらいは案内できる。

私の言葉にヴィル様は少し目を見張り、そして細めた。綺麗な顔に、微笑みが浮かぶ。

「ああ。そうしよう」

嬉しそうで何よりだ。それにしても、他の人の前でもこんなふうに笑つたら、周囲から的好感度はうなぎ上りだらうに。

……なぜだろう。今、胸の奥がモヤツとした。

ヴィル様が他の人と交流を持った時、彼が魔王だとバレないか、不安なのかな? だけど、ヴィル様に友人が増えるのは悪い事じゃないはずだ。万が一正体がバレた時に、『なんだ、魔族と言つても自分達と変わらないな』と言つてくれるような友人が増えるといいなと思う。

そんな事を考えつつおしゃべりをしていると、メルディ様がキリのいいところで席を立つて言つた。

「そろそろお暇いとまいたしますわ。ミラさん、後で必ずステップの復習をしてくださいましゅ」

「はい」

カーラさんがドアを開ける。すると、反対側の窓から強い風が吹き込んだ。空に、灰色がかつた雲が急速に広がつていて。開け放つた窓のガラスが揺れて、大きな音を立てた。

「風が強くなつてきましたね。雨が降るかもしれません。道中お気をつけて」

私の言葉に、メルディ様が頷く。

「ええ。ありがとうございます。それではごきげんよう、ミラさん、勇者様。また明日」

私のお見送りは戸口まで。執務に戻るアイン様が、彼女を階下まで送つてくださる。

エメルさんとカーラさんは、お茶の道具を片付けるべく、部屋を出て行つた。

「ヴィル様、おさらいに一曲、おつき合い願えますか？」

「私がお願ひすると、彼は手を差し出してくれる。

グノーが大地の宝珠を再生し、流してくれた曲にあわせて、私達は部屋の中央へ移動した。

思い切つてヴィル様に体を寄せ、リードされるままに足を動かしてみる。すると、驚くほど踊りやすい。でも、ずっとこの距離なのは恥ずかしいかも。

そう思つた瞬間、彼の足を踏んだ。ギクリと体を強張らせると、ヴィル様が少し強引にリードして、立て直してくれる。

「ミラ。俺の足は踏んでも構わないから、動き続ける。そうすれば、誰も気づかない」
ヴィル様の荒っぽいアドバイスに、私は目を丸くする。そしてクスリと笑つて、彼を仰ぎ見た。
〔あらざが〕

「粗探しに夢中な人は、見ているかもしれないですよ？」

「放つておけ。足元はドレスに隠れていて、ほとんど見えはしないのだ、言いがかりにしか聞こえまい」

確かに。本番で着るロングドレスは、つま先が出るかどうかギリギリの長さだ。しかし

て大多数人は他人の足元なんか見ていないから、私が踊り続ける限り、違和感は覚えないだろう。そんな中でミスを指摘しても、その人のイメージが悪くなるだけだ。

「でも人の足を踏んでおいて平然と踊るのは、難しいですよ？」
こんなヒールをぐつさり刺してしまうんだもの。普通、「うわっ、やつちやつた！」つて、思うよね。

反射的に体が竦んでしまうのは、仕方ない。それとも、魔法が当たり前に使われるこの世界では、「身体強化していれば平氣でしょ？」と素知らぬフリをするのが普通なんだろうか。

「ではこれ以降、すべて踏むつもりで踊ればいい」

「全力で踏みに来いと!? でもつて踏み慣れるとおつしやる!?」

ヴィル様つてば、時々突拍子もない事を言う。つていうか、他人様の足を踏み慣れるのは、やっぱりダメでしょ。

「さすがにそんな練習法はないですよ、ヴィル様」

「そうか。ああ、ちょうど曲が終わつたな」

ダンスの後半は、おしゃべりしながら動いているうちに終わってしまった。
あれ？ 私、もしかしてちゃんと踊れてた？

首を傾げて いる間に、再び音楽が流れ出す。

「もう一曲、踊つておくか？」

ヴィル様の問いに、私はコクリと頷いた。踊れるようになったかどうかは、やつてみればわかる。

結果は——まあ、最初の時よりミスは減ったかなって程度。踊れたと思ったのは、気のせいだつたらしい。メルディ様ならリベンジで「あと一回！」と言うのだろうけど、私は違う。宝珠を操作して音楽を止めた。

「もういいのか？」

「はい。カーラさん達がしばらく戻らなさそうなので、首輪を外すために水系浄化魔法を試してみたいと思います」

八百年前、皇帝が魔族達を支配するためにはめた犯罪奴隸の首輪。はめた者以外には外せないそれが、ヴィル様の首にもある。私はそれを他人に見られる前に外したくて、先日、彼の首輪を調べさせてもらった。

その時、私は首輪作製の犠牲となつて囚われているという元精霊達に、うつかり精神だけ捕まってしまったのだが……。災い転じて福となす。そのおかげで、彼らを浄化できれば、首輪を外せると知ったのである。

からくも逃げ帰った私はヴィル様にそれを報告し、水系浄化魔法で彼らを浄化可能か試すと約束した。でも、なかなか約束を果たせなかつたんだよね。

ヴィル様が魔族なのはもちろん、首輪をはめられている件も、王家とガイ——私の幼馴染みで、私と同じく王家の庇護ひごを受けた学園に通う男の子以外には秘密。ゆえに、他の人がいっては実験できなかつたのだ。

夏至祭げしじさいに参加するなら、礼服を作らなくちゃいけない。その採寸の際に、職人さんに首輪を見られてしまう可能性がある。それに備えたかったが——採寸は今朝行われてしまつた。

さればその前に外しておきたかった。

首輪自体は、薄いチヨーカーみたいな物。ヴィル様はハイネットクのアンダーシャツを着て採寸を受けていたから、首輪は隠れていたけど、職人にバレないか、気が気じやなかつたよ。

職さんは、顔色一つ変えずに仕事をこなして帰つて行つた。だから、気づかれなかつたかどうかはわからなくて、ちよびりもやもやする。

でももう採寸しちゃつたし、済んだ事を気にしても仕方ないよね。今後のために行動

しよう。

私はヴィル様を手招きして、長ソファーに座つてもらつた。そして、デイーネと合一する。

「合一」とは、精靈を体に受け入れて、一つになる事だ。魔法を発動させるのに必要な魔力を、精靈が直接攝取できる。つまり精靈が私の魔力に干渉可能なので、魔力暴走防止の一環となつてゐる。

無詠唱でも魔法が使えて便利な合一だけど、使える魔術師は、今のところ私だけだ。

デイーネの姿が光となつて消え、私の髪に軽くウエーブがかかる。合一は成功だ。

清淨なる水で手巾を湿らせた私は、お礼を言つて合一を解く。合一した状態で首輪に触れて、何かあつては困るからね。

準備を終えた私は、襟を開いたヴィル様の隣に座つた。

「まずは清淨なる水から。痛みや違和感があつたら、言つてくださいね」

「ああ」

手巾でそつと首輪に触れる。チラリとヴィル様を見上げると、問題ないと返された。そのままグルリと一周拭つてみたが、特に変化はない。試しに首輪と皮膚の境に指を引つかけようとしたけれど、無理だつた。思わずため息をこぼす。

「……あいかわらず、引っかかりもしませんね。次はレベルを上げてみますが……」「駄目で元々だ。気にするな」

ヴィル様はそう言つてくれても、私としては残念でならない。浄化魔法を使つた事で、首輪に囚われている元精靈達が、喧嘩を売られたと思ってないかも気がかりだ。

元精靈達に反発されでは淨化が難しくなるだろうし、彼らを傷つけるのは本意ではない。できれば彼らの様子が知りたいと思う。

でも、わざと捕まつたら、ヴィル様やグノーレ達に心配をかけてしまうよ。

私はもう一度首輪に触れて、目を閉じた。元精靈達に届くとは限らないが……

（今のは攻撃じゃないからね。だんだん強い浄化魔法を試していくけど、君達を解放するためなの。だから怒らないで、素直に浄化されてね）

祈るように願つてみたものの、これで大丈夫だろうか？

ホーリードロップ。
なんせ今から私が試そうとしているのは、高位の水系浄化魔法・聖なる雪。しかも私

の聖なる雪は、魔術師長のグリンガム様に、魔物にも通用するだろうと言われたくらいだからまずは、水で薄めた物を試すつもりだ。体に埋められた魔石の影響で、ヴィル様が魔物として怪我をしてしまうかもしれないからね。

でも、本当にやつていいのかな？

一度は納得したはずの疑問が、再び浮かんでくる。

わかつてゐるんだよ。犯罪奴隸の首輪が外れなければ、今後もヴィル様の人生の邪魔になる。そして首輪に囚^{とら}われている元精靈達は、いわば幽霊だ。このままでいいはずがない。攻撃的でも、聖なる零^{ホーリードロップ}は淨化魔法。上手くいけば元精靈達は首輪から解放され、新たな命として生まれてくるだろう。だから、その過程における彼らの気持ちを重要視しなくとも……

「いいわけあるかー！」

私は首輪から手を離し、拳^{こぶし}を握^{にぎ}つて叫んだ。

「首輪は絶対外したいけど、攻撃魔法もどきな淨化魔法で元精靈達を傷つけるのは気が咎^{とが}めるし！ 彼らが反発したら、淨化が厳しくなるかもだし！」

背後でディー^一ネ達が、「マスターがご乱心!?」なんて慌てているのは、スルーする。

だつてもう、グルグル考えてしまって、胃がキュー^ツとなるくらいにいつぱいいつぱいなんだもの。叫んで発散しないとやつてられない。だいたい、相手の気持ちを気にせず強制排除できる性格なら、こんなに悩んだりしていなんじよ。気になるんだから仕方ないじゃないか！

元精靈達は、人間の都合で魔力を搾^{しづ}り取られて死んだ。その苦しみや恨みすら魔道具の材料にされているのか、魂^{たましい}が首輪に囚^{とら}われている。

できれば、元精靈達を説得して淨化したい。穏やかな気持ちで自由になつて欲しい。

だけど説得するためにわざと元精靈達に捕まるのは、みんなを心配させてしまう。

「ヴィル様。私が使う淨化魔法が攻撃的な事、元精靈達にはせめて前もつて伝えたいです。でも首輪越しじや、伝わった確証が持てません。直接会いに行つてはダメですか？」突然叫び出した私に驚いていたヴィル様を見上げて、お願いしてみた。ヴィル様は無言で見下ろしてくる。

「……ダメ、ですか？」

もう一度聞いた私の表情は、へによりと眉を下げた情けないものになつていただろう。

そんな私の目元をなでて、ヴィル様が小さく息を吐いた。

「駄目だと言つても、聞き入れそうにない目をしている」

「でも、無断でわざと捕まつたら、心配して怒るでしょう？」

小首を傾^かげて言った私に、ヴィル様はもう一度息を吐いた。

「一言言わればいい、というわけでもないと思うが？」

「そこを何とか。一度捕まつて戻つてきていますから、戻るコツは掴んでますよ？」

次

もちろんと帰つてくる自信、あります」

現実世界に大切なものがいっぱいある私は、元精霊達の恨みに呑み込まれたりしない。
「ダメですか？」

ヴィル様の手を取つて、三度目の問い合わせ。彼の目をひたと見つめて訴える私と、無表情のヴィル様との睨めっこが始まった。たぶん、視線を逸らしたら負ける。

しばらく無言で見つめ合つていると、ディーネのため息が聞こえた。

「マスター。勇者を落としたいなら、色仕掛けよりロリ仕掛けの方が効果ありだと思うわ」

「は？」

私は思わず間の抜けた声を上げて、ソファーの後ろに立つディーネを見上げた。

「失礼な。色仕掛けをした覚えはないよ。つていうか、ロリ仕掛けって、何？」

「勇者は体内の魔石のせいで、子供好きなドラゴンの習性に影響を受けているでしょ。子供姿でお願いした方が効くと思うの」

なるほど。子供姿イコール、ロリ姿。ロリ姿でのおねだりがすなわち、ロリ仕掛け。……その呼び方に思うところがあるものの、手段としては一考の余地ありだろうか。

「でもそれだと、庇護欲の方が強くなつて、よけい反対するんじゃないか？」

「そうだね。前回マスターの精神が首輪に囚われた時、子供姿だつたし」

「同じ状況は、抵抗感が強いですよね」

検討する私の耳に、サラ、グノー、ルフィーの考察が届く。

「じゃあ、ダメだ。反対される要素を増やす気はない。

「そういえば、助言をくれるつて事は、みんなは元精霊達のところに行くのを許してくれるの？」

私の問いに、精霊達は肩を竦めてみせる。そしてグノーが代表して答えた。

「僕らのマスターは、やれると言つたらやれる人だからね。ちゃんと帰つてくると信じるよ」

「帰つてくるよ。約束する」

「一つ頷いてヴィル様に向き直ると、彼は変わらない無表情で私を見つめていた。

う。……睨めっこから先に視線を逸らしてしまつたけど、まだ負けじやないよね？

勝負の再開とばかりに見つめ返せば、彼はいきなり私を抱き寄せた。

「なつ、ななな、何ですか！」

（逆色仕掛けですか！？ でも私は丸め込まれたりなんかしないですよ！）

決意したにもかかわらず、危うく屈しそうになつたその時、「五分だ」と囁かれた。

「え？」

「五分だけ、元精靈と接触を試みる事を許す。会えても会えずとも、それ以上は駄目だ」「わかりました。五分以内に元精靈達と接触して、必ず帰ってきます」

「ヴィル様からの譲歩に、私はすぐさま承諾した。

約束を交わした事で、拘束が緩む。彼の腕から脱した私は、さつそく首輪に右手を伸ばした。その手をヴィル様が捕らえる。

「ヴィル様？」

「おひかしんで呼んだ私に答えず、彼は私の手の甲に口づけた。しかも――

「な、なめ、なめ……」

私がパニックを起こしていると、ヴィル様の唇が離れる。そしてその感触が消えぬうちに、手の甲にボウッと花のような形の魔法陣が光つて消えた。

「印をつけた。これで大半の者は、お前に手を出せまい」

「そりやそりやだろ」

「ドラゴンの半身候補に手を出すなんて、よっぽど魔力に鈍いか馬鹿か、命知らずだよ」

「さつきの魔法陣は、ドラゴンの半身候補——つまり、婚約者の印だよ」

「こん、やく、しゃ？」

「左手にも同じ印をつけたら、妻になる。彼らは伴侶への執着が凄いんだ。その印を持つ者に危害を加える事は、ドラゴンに『自分を殺してくれ』と言うようなものだよ」

「果然としつつも、私はなんとかグノーの説明を理解した。

「……つまり、虎の威を借りる狐的なお守り？」

「ディーネヒルフィーがコクリと頷いて同意する。

「初めて聞く言い回しだけど、なんとなく意味はわかるわ。だいたいそんな感じよ」

「かなりキヨーレツなお守りです」

「ヴィル様の口ぶりからして、元精靈から私の身を護るために施してくれた印なんだろう。でもその実態は、ドラゴンの婚約者や妻を示すマーク」

「わあ、魔王勇者様と婚約しちゃつた。でもプロボーズの言葉はなし。目的を考えればプロボーズは必要ないんだけど、複雑な気分だ。嬉しいような、悔しいような。なんだ

「心配せずとも、ミラが他の者と婚約する際には消す」
「はあ」

微妙な気分が更に増した。よくわかんないものの、癪である。

そんな私に、ヴィル様は時計を指し示した。

「それよりもいいのか？あと三分だが」

「もうカウントしてたんですか！？ するいですよ！」

「教えてやつたろう？」

ヴィル様は悪びれる様子もない。きっと延長を求めて無駄だ。今は文句を言う時間も惜しい。

私は両手でヴィル様の首輪に触れ、目を閉じ、大きく深呼吸した。
思い浮かべるのは闇。悲しみと恨みに沈む闇の世界。そこに囚われた精霊達の魂。
私は彼らに捕まらないよう張っていた気を緩めて、彼らの事だけを考えた。

周囲からすっと音が消える。

ゆっくりと目を開ければ、暗闇の世界が広がっていた。元精霊達がいる、首輪の中の

世界だ。前回と違う点をあげるなら、元精霊である闇色の塊かなまりが、既すでににそこにいるくらいだろうか。

……襲うために、私を待ち構えていたわけじゃないよね？いやいや、時間がないからポジティブに考えよう。呼び出す手間が省はぶけて助かったよ、うん。

それでもちょっと不安になつて、私はヴィル様が印をつけた右手を胸に抱え込んだ。

「あれ、手が小さい。子供になつてる」

私はいつの間にか、六歳の姿に戻つていた。服もなぜか学園の制服である。

前回ここに来た時は、現実世界でも子供姿だつたけど、今回はさつきまで、大人姿だったのに……。あれはヴィル様の魔法によって与えられた仮の姿だから、精神体のみになるこの世界では、本来の姿になつたのかな？

『キタ』

『ホントニ、キタ』

首を傾げていた私の脳裏に、元精霊達の言葉のようなものが浮かんだ。

「ひょっとしてこれ、概念通信？」

実体を持つ高位精霊となつたグノー達は、普段、声を発して会話をしている。そこまで成長する前は、こんなふうに私の頭の中に文字が浮かび、読むまでもなく意味合い——

概念が伝わってきた。

概念通信とは、本来は資質がある魔術師が、契約した精霊のものしか受け取れない。でも私は、グノーラと契約を交わす前に、片言の概念通信を受け取っていた。

下位精霊の果てである元精霊達が、概念通信を使えるのは不思議じゃないし、私が彼らと契約していないにもかかわらず、それを受け取れるのも、ありえる事なのかかもしれない。

「片言の概念通信は久しぶり」

私は少し懐かしい気持になつて、目を細めて元精霊達を見た。

「約束通り、また来たよ。あなた達を首輪から解放するために、さつき清淨なる水ビューアウォーターを使うてみたんだけど、怖がらせちゃったかな？」

小首を傾げて問い合わせてみる。しかし答えはなかつた。

「これから聖なる零ホーリードロップを使うつもり。とはいって、あなた達を傷つけるつもりじゃないの。怖いかもしれない。でも、私を信じて净化を受け入れてもらえないかな？」

これにも反応がない——かと思ひきや、元精霊達がざわめいた。

『……イッショ』

「一緒？」

何が？ と問い返そとした瞬間、元精霊が飛びかかつてきた。

私はギョッとしてそれを躊躇かねする。

『ヤサシイ。ズット、イッショ』

前後を挟まれた私は、ジリジリと横に移動した。

ちょっと待て。印があれば、手を出されないんじやなかつたの？

そう思つたと同時に、右手の甲に消えたはずの魔法陣がポウッと光つて浮かび上がる。

えつ、今、光つた？ どういう仕組みなの！

私が戸惑っている間も、元精霊達はにじり寄ってきていた。私は元精霊達との距離を測りつつ、グノーの言葉を思い出す。

——『ドラゴンの半身候補に手を出すなんて、よっぽど魔力に钝にぶい馬鹿か、命知らずだよ』

彼らは下位とはいえる精霊だったのだ。魔力に钝いとは思えない。知能レベルはわからぬけど、命は既にないから気にしてないんだろうか？ 魂すら消されるとは思わないの？

再び突進してきた元精霊を避け、私は暗闇の中を走り出した。

『カケッコ？』

暗闇の世界から戻つて真っ先に目に入ったのは、ヴァイル様の綺麗な顔。暗闇の世界に飛んで意識を失つた私を、彼の膝を枕にして寝かせてくれていたらしい。

私は後ろを振り返つた。その瞬間に飛びかかってきた元精靈を躊躇し、もう一度告げる。
「聖なる零は薄めの濃度から始めるよ！」

そして本体である体を意識して、現実世界へと帰還した。

暗闇の世界から戻つて真っ先に目に入ったのは、ヴァイル様の綺麗な顔。暗闇の世界に飛んで意識を失つた私を、彼の膝を枕にして寝かせてくれていたらしい。

ため……

元精靈達はそう言うと、追いかけてくる。

「遊びだと思つてる!?」

私に危害を加えるつもりはないから、ドラゴンの怒りを買うとは思つていないのかかもしれない。

「でもこれじゃあ、淨化魔法を受け入れてほしい、って説得するどころじゃないよ」

人への恨みはどこに行つたんだと聞いただしたいくらい、元精靈達はなぜか私に懷いてくれているらしい。私は、彼らを振り切るように走つた。走つているうちに、多少攻撃的な淨化魔法を行使しても大丈夫かも？ と思えてくる。

承諾はもらつてないけど、また淨化魔法を使う事は伝えられたよね？ 最後に念のため……



視線を巡らせれば、おちび姿の精靈達が、長ソファーの背もたれの上にいた。

「ただいま」

ニコリと笑って言うと、「お帰りなさい」と返される。私はゆっくり起き上がった。

「元精靈には会えたか?」

私はソファーに深く座り直してから、ヴィル様の質問に答える。
「はい。前回とは違つて、いきなり襲われたりはしませんでした。聖なる零を使う事も伝えたんですけど……拒絶、はされなかつたと思います」

「言葉が通じなかつたのか?」

「うーん、そういうのとはちょっと違うような?」

どう言えばいいのかと、私は腕を組んで首を傾げる。

「向こうに行つたら、元精靈達が待ち構えていたんです。片言の概念通信を受けたのホーリードロップで、清浄なる水ヒュアウォーターが怖くなかつたか聞いたんですが、返事はありませんでした。次に聖なる零ホーリードロップを受け入れて欲しいとお願ひして……」

「まさか攻撃を受けたのか?」

「攻撃というか、『ヤサシイ。ズットイッショ』とか言つて、飛びかかれました。私が逃げると、彼らは『カケッコ?』と言つて追いかけてきました」

ヴィル様は無言で眉を寄せる。

「襲つてるわね」

「襲つてますね」

ディーネヒルフィーは半目になつて、そう言つた。

「元、でも精靈なんだから、半身候補の印を感じ取れないはずないんだけど……」

「長年勇者の魔力にあてられて、感覚が麻痺したのか!! それとも馬鹿になつたのか!?」

ゲノーが困惑の声を漏らし、サラが頭を抱える。するとヴィル様が高圧縮した魔力で短剣を作り出し、切つ先を自身に向けた。

「わー!! 何してるんですか!!」

私は慌ててヴィル様の腕にしがみつく。

「维尔様、ご乱心!!」

「危ないから離れていろ」

「離れたら、もっと危ない事をする気でしよう!!」

大人姿の私は魔力を暴走させる危険があるから、一人では身体強化すら使えない。素すの力でヴィル様を止められるわけがないのだけど——いや、仮に身体強化ができても不

可能かもしれないが、ヴィル様の短剣を持つ手は止まっていた。私に怪我をさせないためだろう。

「……首輪を切つてみるだけだ」

「ダメです！ ヴィル様の事だから、魔力剣で首輪を切るのは試し済みなんでしょう？ 効果がなかつた方法を、もう一度試すとは思えません。魔力を高圧縮した剣を試すのは初めてですよね？」

「ああ。魔力を圧縮するなど、先日ミラが魔力制御訓練でやるまで思いつかなかつた過去の私の馬鹿者め！」

内心で罵つてみても、お手本を見せてしまつたものは仕方ない。

「通常の剣ではヴィル様を傷つけられないけど、その魔力剣まで平気とは限らないでしよう！」

生半可な刃物じや、ヴィル様の体は傷一つつかない。しかし魔力剣は、魔力喰らい——鱗に覆われているワニに似た魔獸を一刀両断するほどの威力を持つ。そして今彼が手にしている短剣には、その時の魔力剣よりずっと多くの魔力が使われているのだ。

「浄化魔法で首輪が外せるのであれば、ミラに任せようと思っていた。だが元精靈は、

半身候補の印を持つお前を襲うほどに愚かなのだ。二度と接触させるわけにはいかない。もしも魔力剣で怪我をしたなら、傷は治癒魔法で治す——

「出血多量になつたら危ないですって！ きっと元精靈達は襲つたつもりはないですから！ かけっこですよ、かけっこ。じゃれつこうとしただけです。仮に捕まつても、もう取り込まれたりしません。余裕で弾き飛ばせます。まったくもつて平気です！」

例えるなら、超大型犬が、遊んでくれと全力で飛びかかってきたようなものだ。それを躊躇して、いなして、屈服させればいいのである。

必死で言いつのる私を、ヴィル様がジッと見つめた。

「……また会いに行くつもりか？」

じゃれつかれるだけでも許せないらしい。これは私に半身候補の印を与えたから、情に厚いドラゴン的に良しと思えないのだろうか？

元精靈達にとつて半身候補の印が意味のないものなら、印を持たなくともいい。むしろ魔法が使えなければひ弱な人間である私が、ドラゴンの逆鱗となる印を持つてゐるなんて、危なつかしくないか？ でも印を消すという提案は、しづらい雰囲気である。

「……わかりました。もう行きません」

私が頷くと、ヴィル様の手から短剣が消えた。私はホッとして彼の腕を解放する。

固

睡すいを呑のんで私達を見守っていたグノー達も、あん堵の息を漏もらした。

「聖なる雪ホーリードロップを薄める用意をしてきますから、待つてください」

私はそう言って、寝室へ向かう。棚から手巾を五枚取り出し、クローゼットの奥から小さな木箱を引っ張り出して、リビングに持ち帰った。そして木箱をテーブルの上に置き、中身を取り出す。

中に入っているのは、外径六センチ、高さ十センチほどの三角フラスコもどきだ。この世界の時計は、時計花という植物で、水に浮かべた状態で使う。なので、それを携帯できないかと思つて作つてみたのである。

私は五つの三角フラスコもどきをテーブルに並べ、その内の一つを手に取つた。

「ディーね。まずはこれに聖なる雪ホーリードロップを入れるから、もう一度合こういつ一をお願い」

「はーい」
合こういつ一した私は両手を合わせて目を閉じる。ゆっくり息を整えながら、滝を思い浮かべた。

大抵の人はここで、一滴の雪しづくと、穢れを浄化した後を想像するらしい。けれど私は違う。ついこの間まで忘れていたけど、私は前世で死んだ時、魔族を人に戻せる存在を探して死後の世界冥府で働いていたフーラルカ様に出会い、神様が実在

すると知つた。無意識はそれを覚えていたんだろう。だから水を司る神、龍神様の住まう滝を思い浮かべていた。

「穢けがれを祓はらい清めたまえ」

(元精霊達が首輪から解放されますよう、力をお貸しください)
（元精霊達が首輪から解放されますよう、力をお貸しください）
龍神様に祈つて、神水を分けていただく——私の浄化魔法のイメージは、神様頼みだ。

「聖なる雪ホーリードロップ」

発動の呪文を唱えれば、白銀に輝く雪しづくが空中に現れる。雪は三角フラスコの中にボトリと落ちて、そこを満たした。それなりの魔力と引き替えに得たのは、およそ百ミリリットル。雪の大きさはどうあれ、一滴である事に変わりはない。

輝きの収まつた聖なる雪ホーリードロップを、残る四つの三角フラスコに分ける。右から順に量を増やしていき、五段階に分けた。そこに湧水わきずいで水を注ぎ、四つの三角フラスコの中身を薄める。最後の一つは原液のままにしておいた。

「ありがとう、ディーね」

ディーねにお礼を言つて、合こういつ一を解いた私は、右端の三角フラスコを手に取る。

「じゃあ、ヴィル様、いきますよ？」

「ああ」

一番濃度の薄い聖なる零を新しい手巾に含ませて、首輪に当てた。しつかり拭おうと首輪を覆えれば、首にも手巾が当たってしまう。私はすぐさま手巾を離して、肌に異常がないか確かめた。少なくとも、見た目は問題ない。

「大丈夫だ。痛みや違和感はない」

ヴィル様の言葉を信じて、手巾を一周させる。そして期待と不安を抱きながら、首輪と肌の境に触れた。

「……ダメですね」

私は手巾をかえて、次の三角フラスコを手に取る。さつきよりも聖なる零の割合が多い水だ。けれどこれも効果がなく、次も、その次も、首輪に変化はなかった。

残るは、聖なる零百パーセントのみ。

私は手巾を濡らし、慎重に首輪に当てた。すぐに離して、異常の有無を確認する。肌はうつすら赤くなつていていたが、一瞬で元に戻った。

「ヴィル様。今一瞬だけ、肌が赤くなつてましたけど……」

彼を見上げれば、領きが返つてくる。

「チリチリとした痛みを少し感じたが、すぐに消えた」

「それなら、薄めますね。ディーネ、もう一度合一を」

三度目の合一をしようとした私の手を、ヴィル様が掴んだ。
「治療魔法を使うまでもない炎症だ。気にしなくていい」
「でも……」

「心配するな。魔石への影響は感じられない。これで首輪が外れなければ早々に見切りをつけ、次の手段を考えられるだろう？」

確かにそうだ。薄めた聖なる零で異常は起こらなかつたものの、首輪も外れなかつた。致命的な問題じゃないなら、多少のリスクは許容すべきなのかもしれない。

ヴィル様の白い肌をジッと見つめ、私は覚悟を決めて領いた。

再び首輪に手巾を当て、ゆっくりと一周させていく。聖なる零が触れた肌はまた一瞬炎症を起こして、すぐに元の白さを取り戻した。

ささと一周させてしまいたいけれど、丁寧に首輪を拭いていく。雑に拭つたせいで効果がなかつたのかもしれない——なんて可能性は潰しておきたかった。

私はやつとの思いで手巾を一周させ、大きく息をつく。そして改めて首輪を見て、目を見張った。

「……首輪の色、少し薄くなつている気がします」

漆黒だった犯罪奴隸の首輪。その色が、ほんの少し灰色がかつて見えた。

元精霊達を浄化できたのかな？

ドキドキしつつ、首輪と肌の境に触ると、首輪が歪んで、指先が隙間に入り込んだ。サラが、「おお！」と声を上げて身を乗り出す。けれど……「……でも、これ以上は入らないみたい」

「あー。そっか」

私の言葉にサラは肩を落としたが、すぐに気を取り直すように笑った。

「でも、引っかかるようになつたのは進歩だ。浄化を繰り返せば、そのうち外れるんじゃないか？」

「そうだよね」

ヴィル様の肌が炎症を起こしちゃうのも、元精霊達の様子も気になるものの、成果はあつた。

窺うようにヴィル様を見れば、しっかりと針を刺される。

「元精霊のもとには行かぬと約束したな？」

「はい」

仕方がないので、私は大人しく浄化魔法を繰り返した。

第二話

その後、何度も聖なる零ホーリードロップを試してみたけれど、指先が入る以上の変化はなかつた。やがて練兵場へ向かう時間となつたので、諦めて移動する。

練兵場へ行くのは、魔力の制御訓練を続けるためだ。夏至祭までに、完全に制御できるようになるとは思つてない。でも、最低限の努力はしておきたい。

『私はそう簡単に魔力を暴走させませんよ』とアピールできれば、夏至祭警備責任者の心労を軽くできるかもしれないしね。

ちなみに先日までは見届け役として、魔術師長のグリンガム様とメルディ様が訓練に立ち会つてくれていたのだが、もうその必要はないとのこと。

AIN様から聞いた話では、グリンガム様は私が使う珍しい魔法を、間近でもつと見ていたかつたと酷く残念がついていたらしい。でも、ご自分の研究や弟子の育成、国の魔術的防衛等々忙しい方だから、魔力制御の試験で夏至祭参加の許可が下りて良かつたと思つ。他の人に迷惑がかかつちやうもんね。

一方、私の夏至祭参加阻止を狙う貴族家への牽制を兼ねて見届け役をしていたメルディ様は、残念がつてはいなかつた。

「見届け役でなくてはミラさんに会つてはならないというわけではありませんし、わたくしはグリンガム様と違つて、魔法を見に行くヒマがありますもの。それに……ダンス講師として通わせていただく間は、AIN様がわたくしのパートナーですよ?」
言葉の後半では、メルディ様は頬を赤く染めていた。かわいい反応、ごちそうさまです。
その場にいたAIN様は、苦笑していた。押しの強い女の子は苦手なんだろうか?
一途でかわいいと思うんだけどねえ。

そんなわけで、メルディ様は時々訓練を見学しに来るとおっしゃつていた。

私の試験が終わるまでは、私の訓練中は練兵場の見学が禁止されていたが、試験が終わつた今は、誰でも自由に見学できるようになるはずだ。だから見届け役でなくなつたメルディ様でも、見学できる。ただ——心配なのは、ヴィル様狙いのお嬢様が、練兵場に殺到する事だ。高魔力保持者のヴィル様を娘婿にと望む貴族が、少なからざいるのである。

そんな彼女達にとつて、私は完全に邪魔者だ。私を排除しようと、魔力暴走を誘発してきたりしたら嫌だなあ。

メルディ様には申し訳ないけど、やつぱり私が練兵場を利用する時は、何か理由をつけて見学者をお断りした方がいいかもしれない。一般人——特に自分で自分の身を守れない人はダメとか。ああ、でも、それじゃあ私が試験で得た安全保証の信憑性が崩れかねないから無理か。困つたなあ……

そんな憂鬱を抱えながら、ヴィル様同伴で練兵場に向かつたのだけど、今日のところは杞憂に終わり、その代わりに面食らつた。大人姿の私を見た一部の騎士様達が、大喜びで迎えてくれたのである。

一部とは、私とガイを王都まで連れてきてくれた魔法騎士様の一人、ゲゼさん率いる美人好きの一派だ。「ひやつほい!」と叫ぶわ、「グッジョブ、勇者殿!」なんて言つてヴィル様の肩を叩くわ……

ヴィル様は理解できない者を見る目で、彼らを見ていた。たぶん反応に困つたんだろう。私もかなり恥ずかしかつた。しかも彼らは私が魔法を使う時に、最前列に陣取つたし。クールドライミストの魔法の練習で、うつかり冷たすぎる霧を出してしまつたのは、仕方ないとと思う。

クールダウン、クールダウン。おまえら落ち着けつてね。

……とはいえ、うん、私も落ち着くべきだつた。今更だけど、巻き込んだ他の皆様ご

立ち読みサンプル はここまで